

縄文時代多孔石の研究

——田篠中原遺跡と内匠上之宿遺跡出土多孔石の分析をとおして——

菊 池 実

1 はじめに

縄文時代の石器のなかに多孔石と呼ばれる石器がある。不定形の自然石の表面に規則性のない多数の凹穴が付されたものをいい、その形状から蜂の巣石、雨垂れ石などと呼ばれているものである。

従前、凹石と同様に取り扱われたりもしてきたが、明らかに凹石とは異なる石器である。ところが、凹石の用途は殻果類のうち特に堅い殻をもったクルミの破砕具が考えられているが、多孔石については用途はもちろんのこと時期も分布も確実に押さえられていないというのが実状である。出土個数が凹石などに比べて少ないことも原因かも知れない。あるいは石皿・石棒などからの転用例もあり、この点でも複雑にしている。

しかしながら、最近の県内調査例から判断すると、多孔石は縄文時代中期末から後期にかけての代表的石器と考えられるにいたっている。その理由は、敷石住居跡や配石遺構の登場と軌を一にするように爆発的増加をみせ、後期になってもこの傾向は持続していくことがあげられるからである。中期末以前では1遺跡でわずかな点数しか出土しなかった多孔石が、中期末にいたって富岡市田篠中原遺跡のように140点の出土、さらに後期の富岡市内匠上之宿遺跡でも69点の出土があるように、他の石器を数の上で凌駕する勢いが認められる。このことはとりまなおさず中期末から後期社会の特質が、石器のなかでは多孔石に最も反映されていると言っても過言ではない。ところが、多孔石の研究は従来あまり行われておらず、基本的事項（使用石材・大きさ・重量・凹みの数・遺構での出土状況等）についても等閑に付され、例えば凹みの数については多数・無数としてお茶を濁されて報告されてきたというのが現状であった。

そこで今回の研究では中期末の田篠中原遺跡出土の140点の多孔石、後期の内匠上之宿遺跡出土の69点の多孔石⁽²⁾について、その特徴を把握することから研究の第一歩として進めることにしたい。併せて中期末以前の多孔石の様相についても簡単に概括したい。

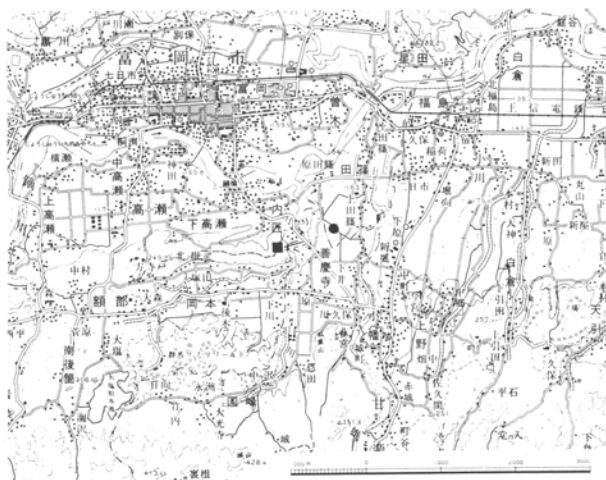
2 遺跡の地理的環境

田篠中原遺跡と内匠上之宿遺跡の所在する「甘楽の谷」あるいは「かぶらの谷」と呼ばれる箱川流域には、大規模な河岸段丘の発達が見られ大きな地域的特色となっている（第1・2図）。これは下仁田町馬山付近から藤岡市上落合に至る二十数kmに及ぶもので、段丘面は上下2段に分かれている。下位段丘は両岸に発達するが、上位段丘は特に南岸において顕著な発達を見せている。富岡市田篠地区に隣接する内匠・下高瀬付近に見られる上位段丘面の標高は、およそ200～260

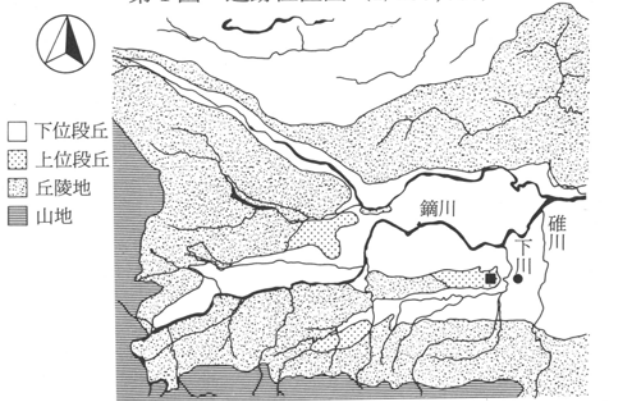
mで南から北へ緩やかに傾斜している。下位段丘面との比高差は40～50mである。

田篠中原遺跡は富岡市田篠に所在する(第1図)。富岡市と甘楽町の境界付近で、甘楽町早道場から雄川に至る約650mの間である。この地域は鎭川の支流である雄川によって形成された扇状地のほぼ扇央部にあたる。標高は約166mである。扇状地には上位・下位段丘面とほぼ同様に砂礫層の厚い堆積が見られる。ただし、雄川・下川・野上川等の河川の上流山間地帯が、馬山金井線と呼ばれる構造線の南側および下仁田以東に広がる三波川変成帯に属しているために、そこから運ばれてくる扇状地の堆積物には、緑泥片岩・石墨片岩をはじめとする三波川結晶片岩と総称される変成岩類(いわゆる“長瀨系”と称される礫種)が大方を占めているのが特色である(第3図)。一方鎭川本流域について見れば、源流である南牧川流域が秩父古生層帯に属することから、チャート・輝緑凝灰岩など、いわゆる“秩父系”と称される礫種が堆積物に多く含まれているのが特色である。この傾向は上位・下位段丘面、現流路を問わずに見られる。

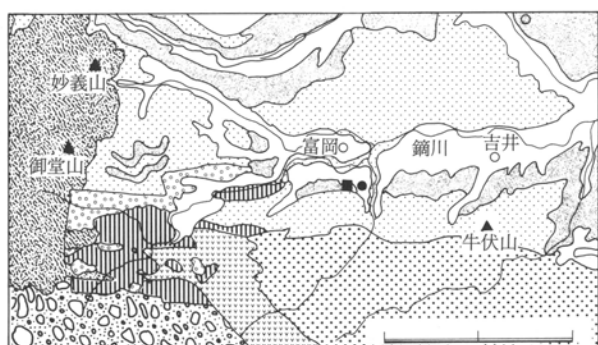
一方、富岡市内匠上之宿遺跡は鎭川右岸に広がる上位段丘面に所在する(第1図)。この段丘面は、西と南を下川、東を野上川に侵食され、通称「離れ山」と呼ばれる東西に長い丘陵地形になっている。東西約3.3km、南北約600



●田篠中原遺跡 ■内匠上ノ宿遺跡
第1図 遺跡位置図(1/100,000)



●田篠中原遺跡 ■内匠上ノ宿遺跡
第2図 遺跡周辺地形区分図(1/200,000)



沖積層、低位段丘堆積層 三波川式変成岩
中位、高位段丘堆積層 御荷鉾式変成岩
第三系 安山岩、変巧安山岩等
白亜系 花崗岩、閃緑岩等
二疊～石炭系(秩父古生層) ●田篠中原遺跡
■内匠上ノ宿遺跡

第3図 遺跡周辺地質図(1/800,000)

mで標高が220～250m、下位段丘面との高低差は40～50mである。この丘陵は北に向かう小支谷によって分断されており、遺跡は丘陵の東端部に位置している。

3 田篠中原遺跡の多孔石分析

田篠中原遺跡からは総計571点の石器が出土している。いずれも縄文時代中期末の加曽利E 3式・E 4式期の遺構に伴うものである。このうち多孔石は140点（24.5%）の出土があり、このほかに凹石113点（19.8%）、石皿30点（5.3%）、磨石35点（6.1%）、打製石斧150点（26.3%）、磨

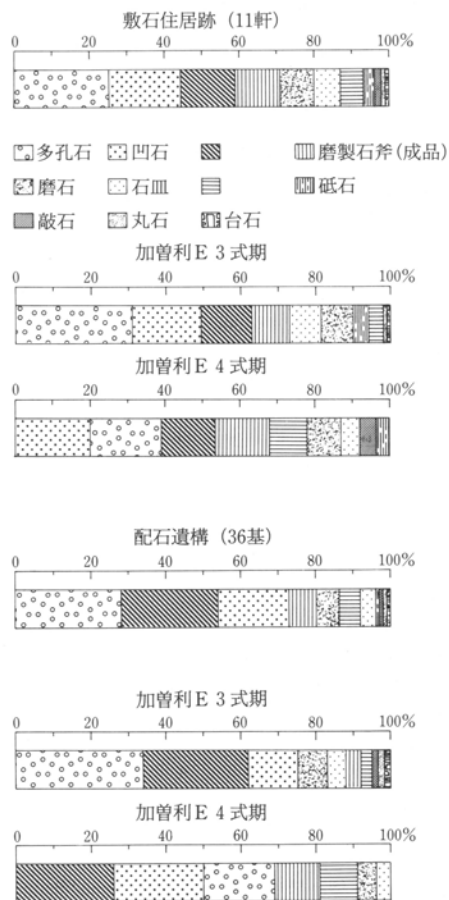
第1表 県内の縄文時代主要遺跡の石器器種別一覧

遺跡名 時期	器種	多孔石	石鏃	石槍	石鏝	石匙	打製石斧	磨製石斧	スクレイパー	磨石・凹石	石皿	丸石	砥石	石棒	その他	計
三原田城	数	0	144	3	22	67	135	7	288	116	31	0	0	0	44	857
前期初頭	%	0	16.8	0.3	2.6	7.8	15.8	0.8	33.6	13.5	3.6	0	0	0	5.1	
分郷八崎	数	3	105	11	23	44	123	33	202	310	39	0	17	1	339	1,250
前期前半	%	0.2	8.4	0.9	1.8	3.5	9.8	2.6	16.2	24.8	3.1	0	1.4	0.08	27.1	
三後沢	数	1	25	3	17	45	11	2	306	28	2	5	1	0	563	1,009
前期前半	%	0.1	2.5	0.3	1.7	4.5	1.1	0.2	30.3	2.8	0.2	0.5	0.1	0	55.8	
勝保沢中ノ山	数	0	44	0	4	36	72	12	76	108	9	0	2	0	281	644
前期前半～後半	%	0	6.8	0	0.6	5.6	11.2	1.9	11.8	16.8	1.4	0	0.3	0	43.6	
見立瀬井	数	0	116	1	17	28	39	24	113	52	11	0	0	0	80	481
前期前半	%	0	24.1	0.2	3.5	5.8	8.1	5.0	23.5	10.8	2.3	0	0	0	16.6	
下箱田向山	数	1	27	0	2	24	21	3	112	87	3	0	0	0	167	447
前期	%	0.2	6.0	0	0.4	5.4	4.7	0.7	25.1	19.5	0.7	0	0	0	37.4	
中畦	数	0	7	1	4	6	33	4	31	15	4	1	1	0	16	123
前期前半～後半	%	0	5.7	0.8	3.3	4.9	26.8	3.3	25.2	12.2	3.3	0.8	0.8	0	13.0	
下牧小竹	数	0	0	0	2	3	10	4	5	16	0	0	0	0	84	124
前期前半～後半	%	0	0	0	1.6	2.4	8.1	3.2	4.0	12.9	0	0	0	0	67.7	
糸井宮前	数	58	69	2	42	162	185	58	1,109	1,058	155	0	38	0	1,458	4,394
前期前半～後半	%	1.3	1.6	0.04	0.9	3.6	4.1	1.3	24.4	23.3	3.4	0	0.8	0	35.3	
中棚	数	4	170	15	51	144	163	69	173	306	62	6	3	2	46	1,214
前期前半～後半	%	0.3	14.0	1.2	4.2	11.9	13.4	5.7	14.3	25.2	5.1	0.5	0.2	0.2	3.7	
清水山	数	3	19	0	1	4	10	0	0	28	20	0	0	0	0	85
前期後半	%	3.5	22.4	0	1.2	4.7	11.8	0	0	32.9	23.5	0	0	0	0	
十二原II	数	0	3	2	1	7	30	0	103	16	3	4	2	0	139	310
前期前半～中期初頭	%	0	1.0	0.6	0.3	2.3	9.7	0	33.2	5.2	1.0	1.3	0.6	0	44.8	
F 9 葉師原	数	2	0	0	2	0	35	2	2	24	3	0	2	0	4	76
中期初頭	%	2.6	0	0	2.6	0	46.1	2.6	2.6	31.6	3.9	0	2.6	0	5.3	
房谷戸	数	0	37	3	13	6	457	7	207	118	64	2	0	10	427	1,351
中期中葉	%	0	2.7	0.2	1.0	0.4	33.8	0.5	15.3	8.7	4.7	0.1	0	0.7	31.6	
大平台	数	28	45	1	10	15	1,602	57	1,001	890	99	0	37	3	48	3,836
中期中～後半	%	0.7	1.2	0.03	0.3	0.4	41.8	1.5	26.1	23.2	2.6	0	1.0	0.08	1.3	
行幸田山	数	13	15	5	8	2	287	26	169	77	40	0	9	2	233	886
中期中～後半	%	1.5	1.7	0.6	0.9	0.2	32.4	3.0	19.1	8.7	4.5	0	1.0	0.2	26.3	
三原田	数	75	300	15	56	59	2,507	128	929	394	159	0	10	39	280	4,951
中期～後期前半	%	1.5	6.0	0.3	1.1	1.2	50.6	2.6	18.8	8.0	3.2	0	0.2	0.7	5.7	
荒砥前原	数	10	14	0	3	0	165	2	0	52	8	0	1	3	154	412
中期後半	%	2.4	3.4	0	0.7	0	40.0	0.5	0	12.6	1.9	0	0.2	0.7	37.4	
上野国分僧寺・尼寺	数	59	37	0	1	2	186	23	70	89	21	0	1	2	45	536
中間地域中期後半	%	11.0	6.9	0	0.2	0.4	34.7	4.3	13.1	16.6	3.9	0	0.2	0.4	8.4	
田篠中原遺跡	数	140	0	0	0	0	150	81	0	152	30	9	6	1	2	571
中期末	%	24.5	0	0	0	0	26.3	14.2	0	26.6	5.3	1.6	1.1	0.2	0.4	
内匠上之宿	数	69	19	2	4	1	217	48	65	217	36	14	11	35	129	867
中期末～後半前半	%	8.0	2.2	0.2	0.5	0.1	25.0	5.5	7.5	25.0	4.2	1.6	1.3	4.0	14.9	
荒砥二之堰	数	34	4	0	1	4	39	7	1	110	11	0	0	2	23	236
前期後半～後期前半	%	14.4	1.7	0	0.4	1.7	16.5	3.0	0.4	46.6	4.7	0	0	0.8	9.7	
深沢	数	15	253	0	45	10	397	8	373	273	53	16	14	17	95	1,569
後期初～中葉	%	1.0	16.1	0	2.9	0.6	25.3	0.5	23.8	17.4	3.4	1.0	0.9	1.1	6.1	
仁田	数	1	14	0	0	2	12	5	6	3	2	0	0	2	13	60
後期	%	1.7	23.3	0	0	3.3	20.0	8.3	10.0	5.0	3.3	0	0	2.2	21.7	
暮井	数	1	2	1	0	0	23	5	3	6	1	0	1	3	7	53
後期	%	1.9	3.8	1.9	0	0	43.3	9.4	5.7	11.3	1.9	0	1.9	5.7	13.2	
横俵	数	30	25	1	13	1	36	4	1	115	25	4	30	17	77	379
後期	%	7.9	6.6	0.3	3.4	0.3	9.5	1.1	0.3	30.3	6.6	1.1	7.9	4.5	20.3	

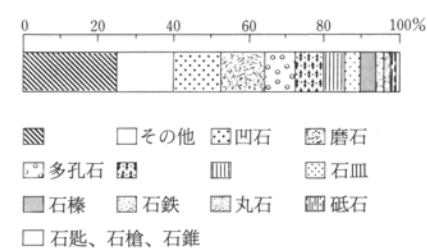
製石斧81点(14.2%)、砥石6点(1%)、敲石4点(0.7%)、丸石9点(1.6%)、石棒1点(0.2%)、台石2点(0.4%)、立石・墓標の石等が出土している(第1表)。多孔石は打製石斧について出土が多いが、打製石斧が縄文時代全般をとおして出土する石器であるのに比して、多孔石は中期後半以前には1遺跡からほとんど出土していないことを考えると、その出土点数は異常とも言える。例えば、県内の縄文時代主要遺跡の出土石器器種別一覧(第1表)からもわかるように前期の三原田城遺跡⁽³⁾・勝保沢中ノ山遺跡⁽⁴⁾・下牧小竹遺跡⁽⁵⁾・見立溜井遺跡⁽⁶⁾では出土はなく、三後沢遺跡⁽⁷⁾・下箱田向山遺跡⁽⁸⁾から各1点、分郷八崎遺跡⁽⁹⁾・清水山遺跡⁽¹⁰⁾から各3点、中棚遺跡⁽¹¹⁾から4点、糸井宮前遺跡⁽¹²⁾からは58点の出土がある。ただし糸井宮前遺跡は長期にわたり集落が営まれていることを考えれば、一時期においてはほとんど出土していないことがわかる。この傾向は中期前半まで継続していき、十二原II遺跡⁽⁷⁾・房谷戸遺跡⁽¹³⁾では出土はなく、薬師原遺跡⁽¹⁴⁾の五領ヶ台式期土坑から1点、中期後半の荒砥前原遺跡⁽¹⁵⁾から10点、行幸田山遺跡⁽¹⁶⁾から13点、大平台遺跡⁽¹⁷⁾から28点、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡⁽¹⁸⁾から49点といった出土である。これが中期末の敷石住居跡・配石遺構の登場とともに爆発的増加を見せる。

田篠中原遺跡出土の多孔石の遺構別出土点数は、環状列石15点(10.7%)、立石2点(1.4%)、敷石住居跡38点(27.1%)、竪穴住居跡12点(8.6%)、配石遺構39点(27.9%)、屋外埋設土器4点(2.9%)、土壌9点(6.4%)、廃棄場所7点(5%)、グリッド14点(10%)である。敷石住居跡11軒38点の内訳(第4図)は、加曽利E3式期の敷石住居跡7軒から25点、同E4式期の敷石住居跡4軒から13点である。

また加曽利E3式期の竪穴住居跡2軒からは12点の出土があるで、E3式期の住居跡からは合計37点の出土となる。配石遺構(E3式期20基・E4式期13基・E末3基)出土の39点の内訳(第4図)は、加曽利E3式期の配石遺構から25点、同E4式期から11点、中期末3点である。これを他の石器の出土点数と比較すると敷石住居跡では多孔石38点を筆頭に凹石29点、打製石斧21点、磨製石斧18点、磨石13点、石皿11点、磨製石斧の未製品10点、砥石5点、敲石3点、丸石・台石各1点と続いている。配石遺構でも同様に多孔石39点を筆頭に打製石斧36点、凹石26点、磨製石



第4図 田篠中原遺跡・石器器種別グラフ



第5図 内匠上ノ宿遺跡石器器種別グラフ

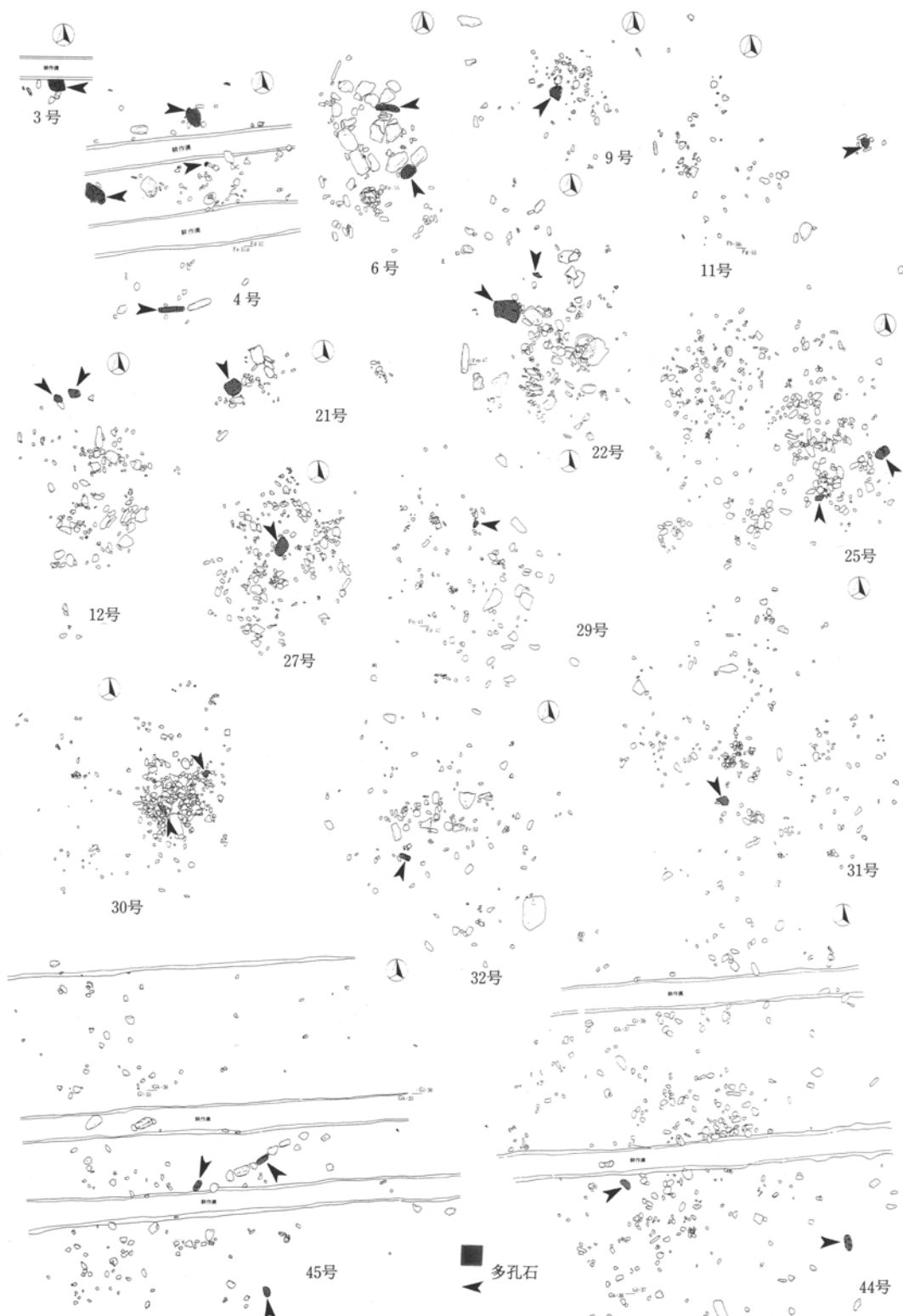
斧10点、磨石9点、磨製石斧の未製品8点、石皿6点、砥石・敲石・丸石・台石各1点と続く。このように多孔石は少なくとも中期末の田篠中原遺跡では代表的石器といっても過言ではない。

配石遺構36基中23基(63.9%)の配石遺構から多孔石39点が出土しており(第6・7図)、このうち4点出土している配石遺構1基、3点出土している配石遺構3基、2点出土している配石遺構7基、1点出土している配石遺構12基となり、出土していない配石遺構は13基を数えた。平均すると1.08点の出土となる。これを他の石器の出土率と比較すると、打製石斧1点、凹石0.72点、磨製石斧0.5点、磨石0.28点、石皿0.17点となり、配石遺構と多孔石の結び付きは強いと考えられる。多孔石は住居跡よりは配石遺構と関係にある石器と言えるのではなからうか。あるいは屋外での使用を基本とした石器と言えるかもしれない。後でも触れるが、住居跡出土の多孔石は日常的に使用された状態ではなく、敷石住居跡の構成石となり転用されている。多孔石の出土していない配石遺構をみると、小規模な遺構であったり、環状列石の張り出し部に該当すると考えられる遺構である。このような事実はより一層、多孔石を配石遺構と結び付ける根拠にもなり、また多孔石に伴う何等かの行為が行われた場所が配石遺構であったと見ることができる。

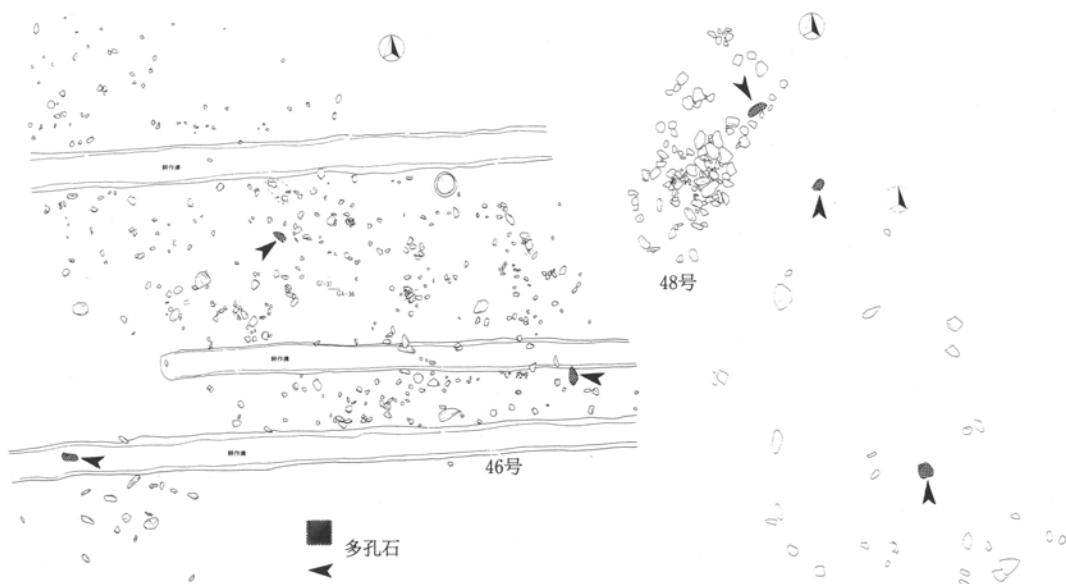
敷石住居跡と竪穴住居跡から合計50点出土しているが、平均では1軒から3.8点の多孔石が出土していることになる。住居跡では配石遺構の約3.5倍の出土率となっているが、これは他の石器の出土率(凹石約8倍、石皿約6.4倍、磨石約3.9倍、打製石斧2倍、磨製石斧5倍)と比べると少ない。

では、住居跡からどのような状態で出土しているのだろうか(第8図)。敷石住居跡から出土した38点の内訳は、縁石として使用されているもの17点、部分敷石に使用されているもの7点、張り出し部に使用されているもの6点であり、計30点の多孔石が敷石住居跡の構成石として転用されている。このほかに炉石として転用されているもの1点がある(第8図②)。特殊な出土状況をしているものに37号配石遺構の多孔石1点がある(第8図⑤)。丸石(流紋岩)に4個の凹みを有するもので、張り出し部の西に意図的に配置されていた。何等かの指標になっていたものであろう。一方、竪穴住居跡からの出土は覆土中のものであるが、2号竪穴住居跡の多孔石の出土状況には興味深いものがある(第8図⑧)。ほぼ床直上に円形状の石の分布が認められるが、その縁石部分に多孔石の出土が認められるからである。敷石住居跡の縁石に転用されている多孔石が多いことを考えると、今後、敷石住居跡出現前の様相を理解する遺構として検討して行かなければならないであろう。

このほかに敷石住居跡からは凹石29点、石皿11点、磨石14点が出土し、また竪穴住居跡からは凹石9点、石皿3点、磨石1点が出土している。敷石住居跡と竪穴住居跡から合計76点の凹石が出土しているが、平均では1軒から5.8点が出土していることになる。配石遺構では平均0.72点の出土となり、住居跡全体では凹石は配石遺構の約8倍の出土率となっている。多孔石の出土率とは大きく異となっている。凹石が殻果類、特にクルミの破碎具としての機能をもったものであることを考えると、日常生活の場である住居跡からの出土は当然であり、配石遺構からの出土が少



第6図 田篠中原遺跡・配石遺構の多孔石出土状況 (S=1/120)



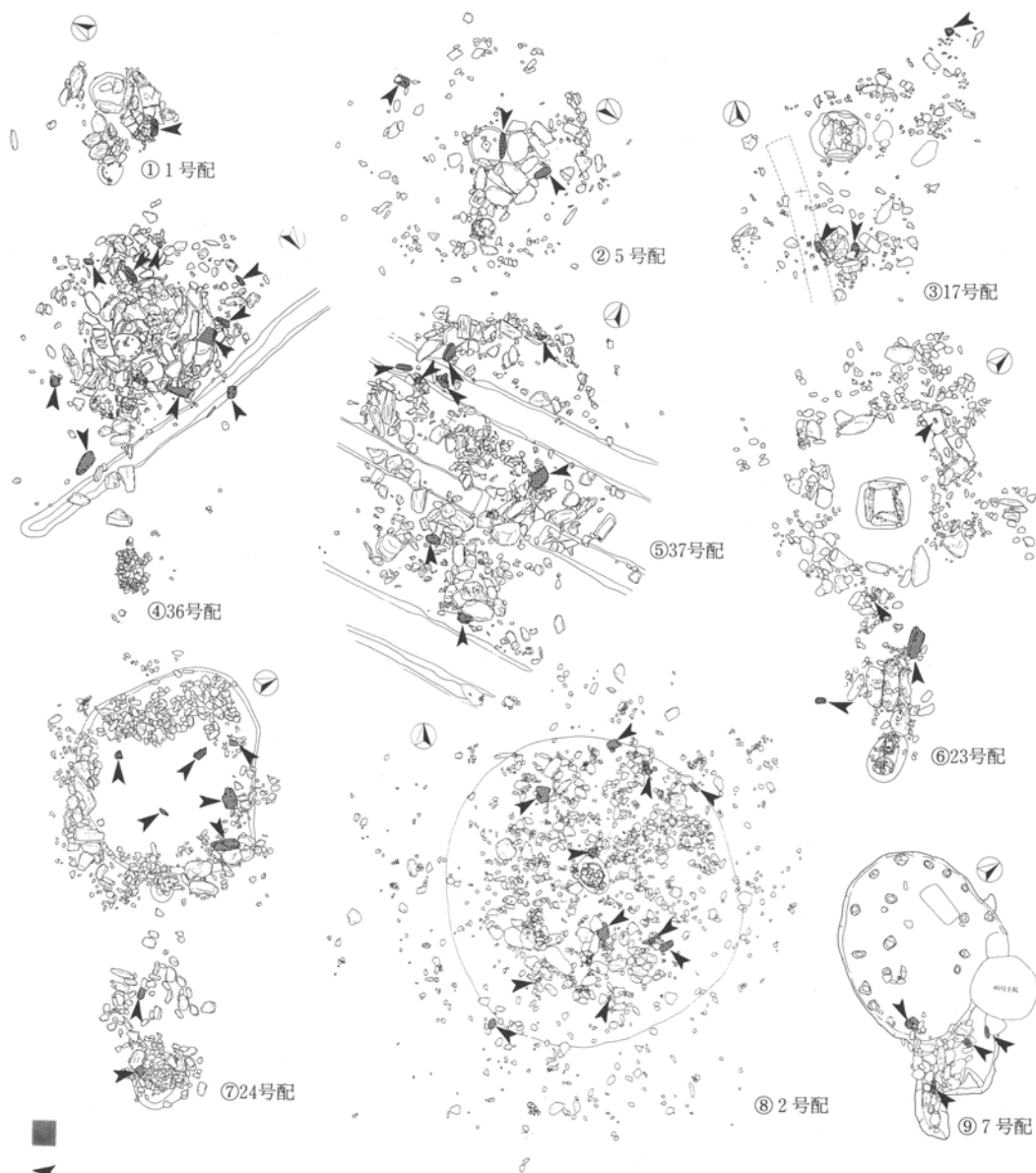
第7図 田篠中原遺跡・配石遺構の多孔石出土状況 (S=1/120)

ないのは、配石遺構が日常生活の場として常時機能していなかったことを反面裏付けていることになろう。そしてその配石遺構に象徴的に多孔石が出土していることは重要な点である。

この傾向は石皿・磨石についても同様である。石皿は敷石住居跡と竪穴住居跡から合計14点出土しているが、平均では1軒から1.08点が出土していることになる。配石遺構では平均0.17点の出土となり、住居跡では配石遺構の約6.4倍の出土率となる。石皿は磨石との併用によって、主として植物性食糧の圧潰・破碎・粉化等に使用されたことを考えれば当然の結果である。磨石は敷石住居跡と竪穴住居跡から合計14点出土しているが、平均では1軒から1.08点の磨石が出土していることになる。配石遺構では平均0.28点の出土となり、住居跡では配石遺構の約3.9倍の出土率となる。しかしこれには凹石のなかに磨石として利用されたものは除外してあるので、実際は4倍以上の差となる。磨石が植物質食糧の処理・加工具としての機能をもっていたものであることを考えると、配石遺構からの出土が極端に少ないのは、凹石・石皿の出土傾向と同様に配石遺構が日常生活の場として常時機能していなかったことを裏付けている。このように他の石器との比較をとおして多孔石の姿が徐々に解明されるのではなかろうか。

環状列石出土の多孔石はいずれも大型であり、基本的には列石の指標の石となっている。土壌出土の多孔石は、墓標として使用されたり、また配石墓の構成石として使用されている(第9図)。

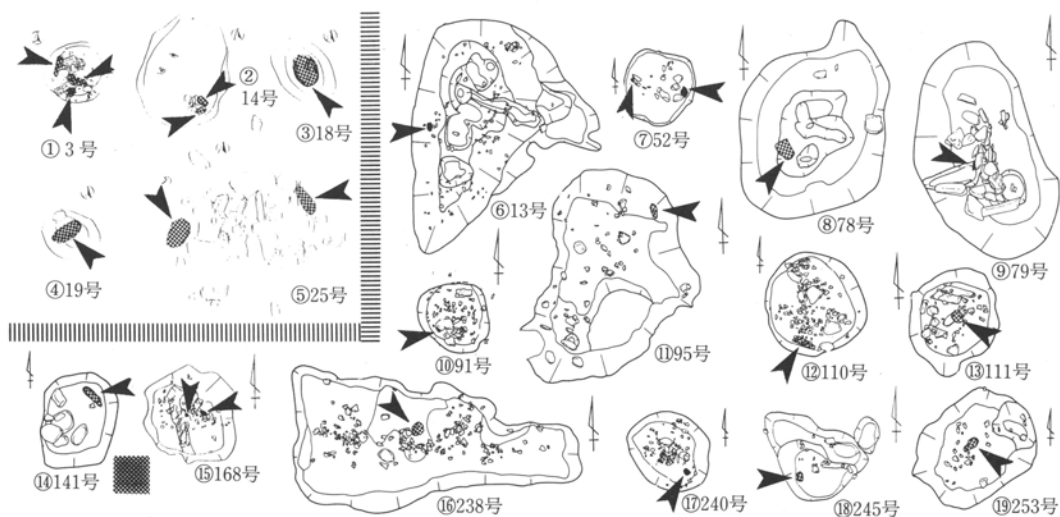
このような出土状況を検討してみると、多孔石は配石遺構での使用あるいは屋外での使用を原則として、そこで執行された何等かの祭祀活動に伴う祭祀具とみることができる。そして敷石住居跡の構成石にも多数転用されていることを考えると、敷石住居跡構築にあたっては少なからず、多孔石に伴う祭祀が反映されているものとなろうか。さらにまた土壌の墓標となっている事実は、土壌内に埋葬された人物の生前における活動を反映しているものであろうか。今後さらに類例を



第8図 住居跡からの多孔石出土状況 (①～⑧：田篠中原遺跡、⑨：内匠上ノ宿遺跡 S=1/120)

集めて検討していきたい。

多孔石の大きさは、最大のもので長径64.2cm、短径29.8cm、厚さ13.7cm、重量43,600g。最小は長径12.9cm、短径5.3cm、厚さ1.8cm、重量200gであり、平均値（完形・ほぼ完形から算出）は長径29cm、短径17.6cm、厚さ9.7cm、重量8,911gである（第11図）。長・短比1.5：1、ほぼ長径40cm・短径26.6cmの中に約8割の多孔石が包含されている事実は、多孔石として使用される石材の大きさにゆるやかな規制が働いていたものであろう。完形品は140点中106点（75.7%）、破損品は34点（24.3%）であり、完形品の占める割合が高く、遺構別による変化は認められない。凹みの数



第9図 土坑からの多孔石出土状況 (①～⑤：田篠中原遺跡、⑥～⑨：内匠上ノ宿遺跡 S=1/120)

は最大102個、最小は1個であり、平均は12.3個(第12図)。9個までのものが71点であり、全体の50.7%を占めている。50個以上の凹みを有するものはごく僅かであった。石材の相違による凹みの数の変化は認めることはできない。凹みの長径は平均17mm、短径14mm、深さ5mmで逆円錐状である。多孔石のなかには1点の凹みを有するものも7点存在するが、これは多孔石特有の逆円錐状の凹みのあるもので、凹石の凹みの状態とは明らかに異なっているものである。焼石の占める割合は19%であり、他の石器の焼け率と大差はない。参考までに凹石の大きさの平均値(完形・ほぼ完形から算出)は、長径15.1cm、短径8.5cm、厚さ3.8cm、重量634gである。完形品は113点中90点(79.6%)、破損品は23点(20.4%)であり、完形品の占める割合が多孔石と同様に高い。また凹みの数は最大8個で、2個と4個の凹みをもつものが多く、平均は3個となった。多孔石と凹石を比較すると大きさで約2倍、重量では約14倍、凹の数では約4倍となり、多孔石と凹石は似て非なる石器となる(第12図)。

使用石材は片岩類118点(84.3%)、砂岩8点(5.7%)、流紋岩5点(3.6%)、輝緑岩3点(2.1%)、安山岩2点(1.4%)、輝岩・石英安山岩・斑斕岩・玢岩各1点(各0.7%)である(第10図)。片岩類の使用が圧倒的に多いが、これはさらに緑泥片岩類61点(51.7%)、石墨片岩類53点(44.9%)、その他の片岩類4点(3.4%)に分類できる。個々の石材では点紋緑泥片岩51点、絹雲母石墨片岩44点となっている。緑泥片岩類は凝灰質岩の中程度変成作用を受けた岩石である。緑泥石が石英の石基に混在する緑色で片理構造がよく発達し、薄くまた厚く板状である。産地は三波川結晶片岩の分布する地域に、石墨片岩類と接して産出するもので、雄川、下川、野上川、鐺川の流域にみられる。石墨片岩類は粘土質岩の変成岩であり、暗黒灰色で節理がよく発達している。産地は雄川や下川上流域である。緑泥片岩類・石墨片岩類の採取地は雄川の河原であろう。

4 内匠上之宿遺跡の多孔石分析

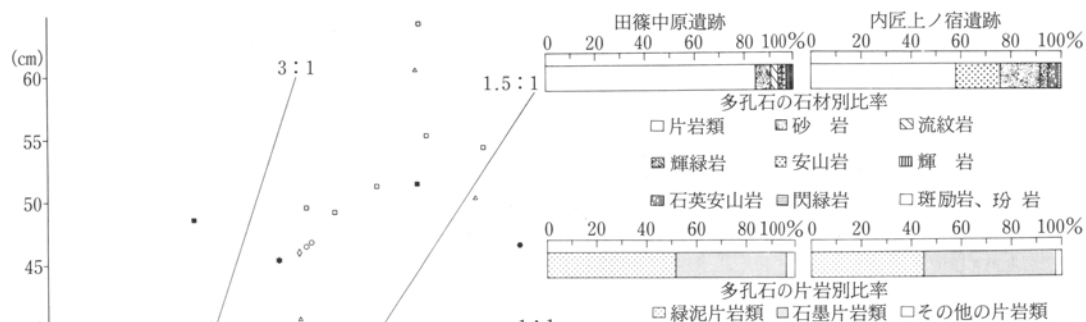
内匠上之宿遺跡からは、剝片・碎片・石核等を含めて総計2,923点の石器が出土している。これらの石器の時期は中期末から後期前半にかけてのものである。そして剝片・碎片・石核を除いた867点をみると、多孔石は69点（8%）出土している。このほかに凹石109点（12.6%）、磨石106点（12.2%）、石皿36点（4.2%）、打製石斧217点（25%）、磨製石斧48点（5.5%）、スクレイパー65点（7.5%）、石棒35点（4%）、石鏃18点（2.1%）、丸石14点（1.6%）、砥石11点（1.3%）、石錘9点（1%）、石匙5点（0.5%）、石槍2点（0.2%）、石錐1点（0.1%）、その他131点（15.1%）が出土している（第1表）。多孔石は打製石斧、凹石、磨石に次いで出土が多いが、この傾向は中期末の田篠中原遺跡とほぼ同様な様相を示している。後期になっても多孔石は主体的石器として機能していたものであろう。

遺構別の出土点数は、住居跡4点（5.8%）、土坑17点（24.6%）、埋設土器2点（2.9%）、配石遺構1点（1.5%）、谷津9点（13%）、遺構外36点（52.2%）である。谷津の9点は遺構外出土と考えて良いため遺構外は総計45点となる。

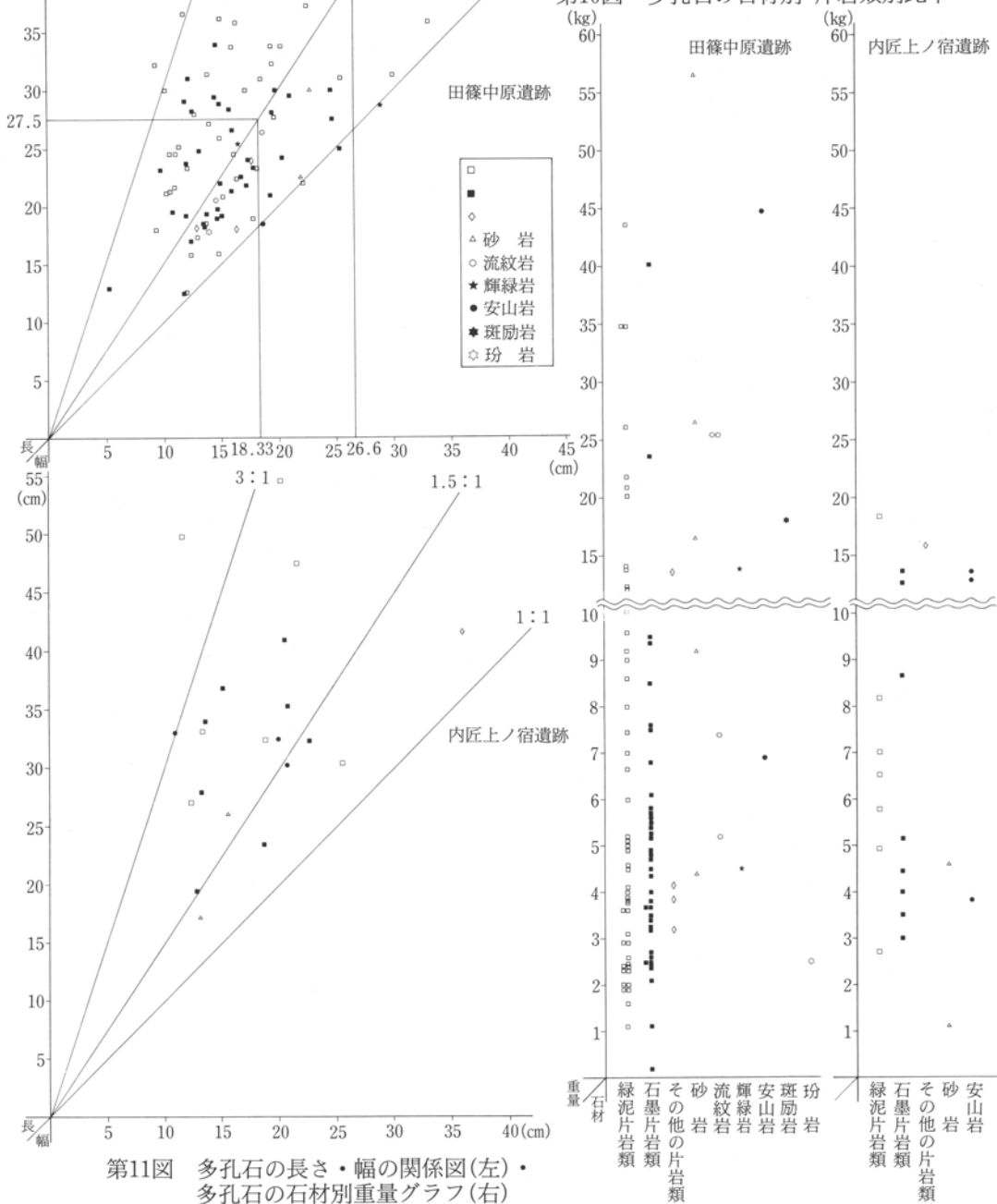
住居跡4点の内訳は、後期堀之内Ⅱ式期の敷石住居跡からの出土であり、張り出し部の構成石となっている（第8図⑨）。日常的に使用された状態ではなくて、田篠中原遺跡例と同様に敷石住居跡の構成石となっていることは重要な事実である。住居跡はこの他に中期阿玉台式期1軒、加曽利E4式期（敷石住居跡の可能性あり）1軒、後期称名寺式期1軒が検出されているが、多孔石の出土はない。

土坑は中期初頭から後期前半に属する185基が検出されているが、その主体は後期の所産である。後期の土坑108基のうち14基から多孔石17点が出土しているが、約13%の土坑から多孔石が出土していることになり、その頻度は少ない。ではどのような土坑から出土しているのだろうか（第9図⑥～⑱図）。風倒木と考えられる土坑から出土しているものもあるが、円形あるいは楕円形の墓坑と考えられる遺構であり、多孔石は土器片や礫とともに出土している。田篠中原遺跡例でもそうであったように墓標としての役割を果たしていたものであろうか。埋設土器の2点は土器周辺の配石から出土しているものである。また配石遺構は5基検出されているが、このうちの小規模な配石遺構1基から多孔石が出土している。田篠中原遺跡と比較した場合、配石遺構の検出がほとんどないために相互の比較検討は残念ながらできないが、本遺跡出土の多孔石が屋外検出の多いことを考えるならば配石遺構はなくても屋外での使用の結果を反映しているものとなろう。

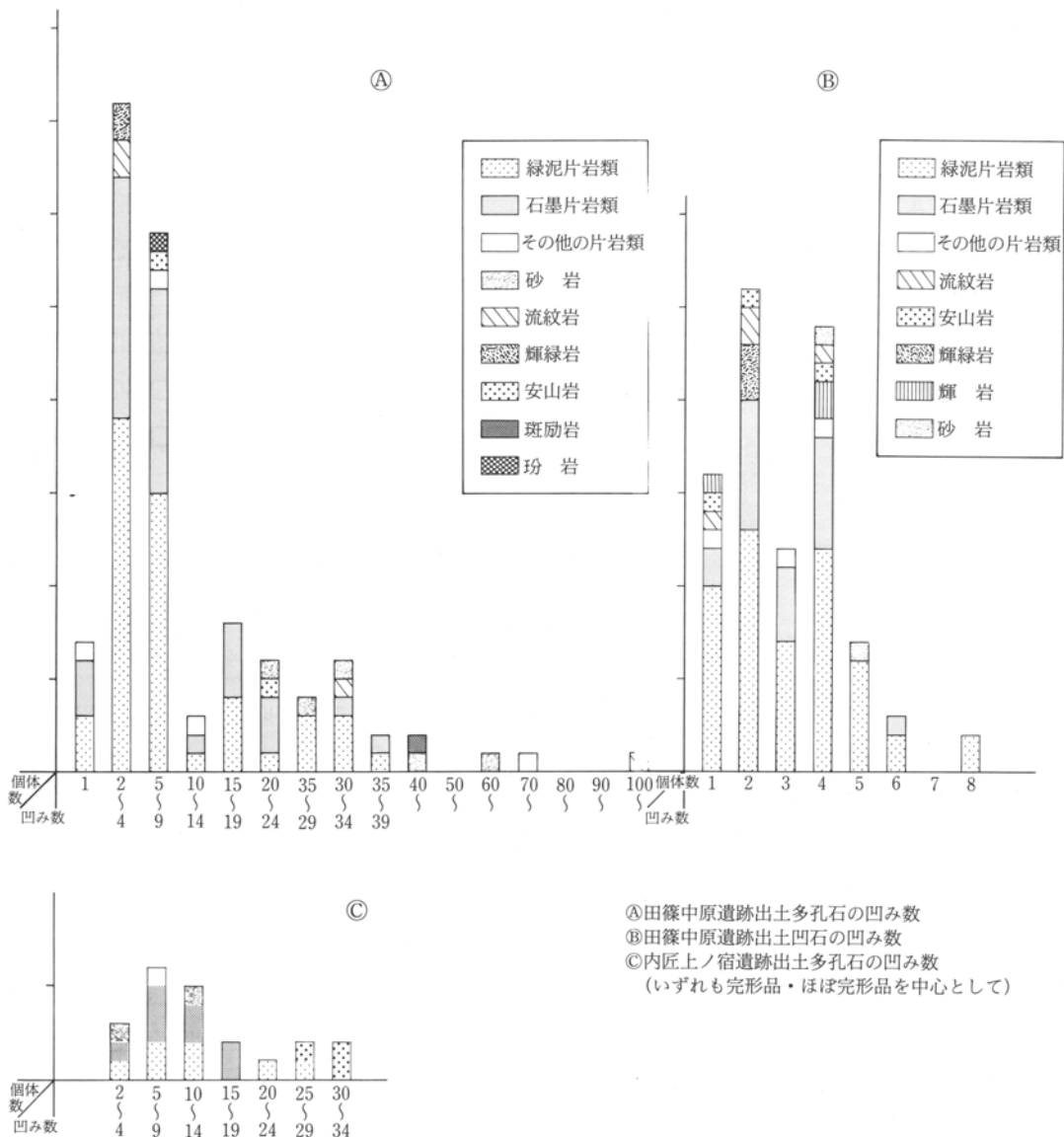
多孔石の大きさは、最大のもので長径54.6cm、短径20.2cm、厚さ10cm、重量18,200g。最小は長径17.1cm、短径13.1cm、厚さ5cm、重量1,100gであり、平均値（完形もしくはほぼ完形から算出）は長径33.6cm、短径17.9cm、厚さ8.2cm、重量7,597gである。田篠中原遺跡の中期末の多孔石とほぼ同じ大きさ・重量と考えて差し支えない。長・短比1.5：1、ほぼ長径40cm・短径26.6cmの中に約8割の多孔石が包含されている事実は（第11図）、多孔石として使用される石材の大きさにゆるやかな規制が働いていたと理解することができる。完形品は69点中21点（30.4%）、破損品



第10図 多孔石の石材別・片岩類別比率



第11図 多孔石の長さ・幅の関係図(左)・
多孔石の石材別重量グラフ(右)



第12図 多孔石・凹石の凹み数

は48点 (69.6%) であり、破損品の占める割合が高い。これは田篠中原遺跡の多孔石とは逆の結果を示している。凹みの数は最大32個、最小は4個であり、平均は13.9個(第12図)。田篠中原遺跡例とほぼ同様の結果となった。凹みの長径は平均15mm、短径11.8mm、深さ3.9mmで逆円錐状である。

使用石材は片岩類40点 (57.9%)、安山岩12点 (17.4%)、砂岩10点 (14.5%)、輝緑岩・石英安山岩各3点 (4.4%)、閃緑岩1点 (1.4%) となっている (第10図)。片岩類の占める割合は少なくなり安山岩の占める割合が高くなっている。片岩類は緑泥片岩類18点(45%)、石墨片岩類21点 (52.5%)、その他の片岩類1点 (2.5%) に分類できる。

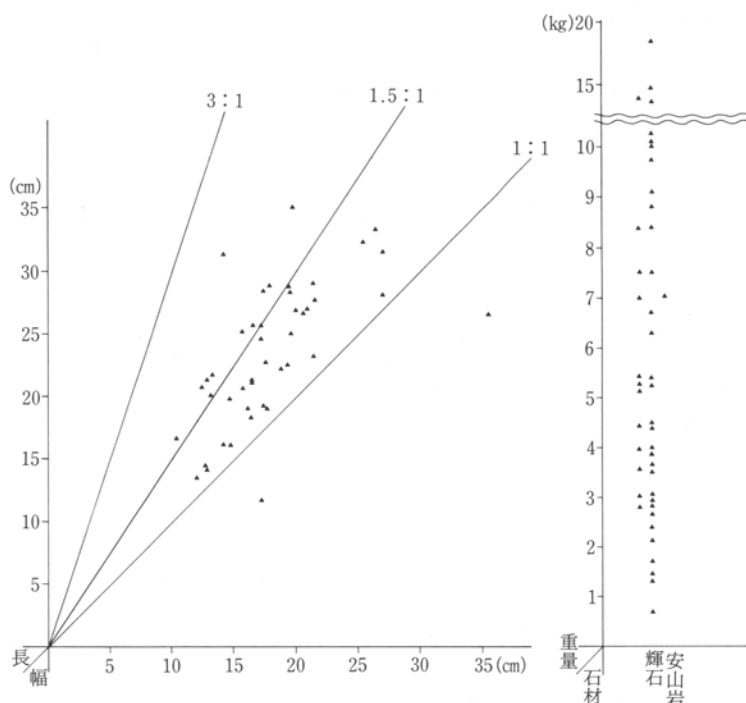
5 ま と め

今回2遺跡を検討対象として分析したのはそれなりの理由があった。田篠中原遺跡は縄文時代中期末の遺跡、内匠上之宿遺跡はその主体は後期前半である。ともに竊川の支流である下川を挟んで対峙し、比較対象としては良好な位置関係・時期関係にある。また、内匠上之宿遺跡の多孔石については、整理担当者の新井 仁氏のご厚意のもと筆者自身ですべてを観察することができ、さらに石材鑑定についても同一鑑定者によって行われていることがあげられる。県内の報告書を見る限りでは、残念ながら粗雑な観察しか行われていなかったために、敢えて筆者の観察の及んだ2遺跡の多孔石についてその特徴を導きだすことから研究の出発点としたかった。

2遺跡の多孔石の様相をまとめるまえに、前期に登場する多孔石を概観してみたい。

分郷八崎遺跡から3点出土しているが、その内訳は前期関山式期の住居跡覆土から2点、土坑覆土から1点である。三後沢遺跡の1点は前期中葉の住居跡覆土、下箱田向山遺跡の1点は土坑覆土上層、荒砥二之堰遺跡の2点は前期後半の諸磯式期の住居跡床面、糸井宮前遺跡の58点は前期中葉の住居跡2軒から2点、前期後半の諸磯式期の住居跡31軒から37点、遺構外から19点の出土である。中棚遺跡の4点はグリッド出土、清水山遺跡の1点は前期後半の住居跡覆土、2点はグリッド出土である。このように前期の多孔石は関山式期から諸磯式期にかけて登場するが、石器の器種別に占める割合が多くても3%台でありこの時期では副次的な存在である。またその出土状態は住居跡覆土からのものが多く使用状態を明確に確認するまでには至らないが、出現期の多孔石としてその用途を考えて行くうえには重要な資料である。このなかで荒砥二之堰遺跡例の2点は今後検討すべき事例である。

さらに前期の多孔石を糸井宮前遺跡出土例で見ると、有尾・黒浜式期の住居跡20軒のうち2軒(10%)の住居跡から出土し、該期住居跡1軒あたり0.1点の出土率となっている。これに対して凹石・磨石・敲石は80%の住居跡から、また1軒あたり約7



第13図 糸井宮前遺跡出土多孔石の長さ、幅の関係図(左)、重量グラフ(右)

点の出土率である。スクレイパーは85%の住居跡から、1軒あたり約3点の出土率となっている。続いて石匙（50%・約1.8点）、台石（55%・0.8点）、磨製石斧（40%・0.5点）となっている。諸磯式期になると69軒の住居跡の約45%の住居跡から出土し、該期住居跡1軒あたり約0.5点の出土率となってくる。前段階に比べると変化が認められる。しかし凹石・磨石・敲石は約93%の住居跡から、1軒あたり約10点の出土率を誇り、スクレイパーは約78%の住居跡から、約2.3点。続いて打製石斧（74%・1.4点）、台石（67%・1.4点）等となり他の石器との格差は甚だしい。多孔石の大きさは最大のもので長径31.5cm、短径27cm、厚さ14.2cm、重量18,500g。最小は長径16.6cm、短径10.4cm、厚さ3.5cm、重量700gであり、平均値（完形・ほぼ完形から算出）は長径23.4cm、短径18cm、厚さ10cm、重量6,040gとなった（第13図）。これは中期末から後期の多孔石よりも若干小型である。長・短比1.7：1～1.2：1の間にほとんど収まるが、これは結晶片岩を主体とした田篠中原遺跡例と輝石安山岩だけの糸井宮前遺跡例との石材の相違にもとづく結果であろう。完形品は58点中44点（75.9%）であり完形品の占める割合が高い。これは田篠中原遺跡例とほぼ同じである。凹みの数については残念ながら記載がないために検討することはできなかった。

中期の多孔石については、中期前半から後半までは前期の様相をそのまま継続しているようである。例えば大平台遺跡A区から検出された35軒の竪穴住居跡（加曽利E式出現期3軒、E1式期2軒、E2式期4軒、E3式期26軒）の内、E式出現期1軒から1点、E2式期1軒から5点、E3式期7軒から12点の出土であり、また土坑から1点、グリッドから8点の出土があった。竪穴住居跡からは1軒0.5点の出土率であり、器種別に占める割合は0.7%である。また上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡からは竪穴住居跡34軒（Z区・A区・B区）、屋外埋設土器18基、土坑409基、等が検出されているが、このうち多孔石は竪穴住居跡12軒から34点、屋外埋設土器1基2点、土坑7基8点、土器溜り2点、炉3点、グリッド4点、不明10点の計59点の出土であった。器種別に占める割合は11%である。このなかには16点もの多孔石が出土している竪穴住居跡もあり特異な様相を見せている。また土坑出土のものは明らかに墓標として使用されている。加曽利E式期段階になって前期多孔石に比べやや微増傾向にあり、また使用状態の明瞭なものも登場している。

上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡出土の多孔石の大きさは、最大のもので長径28cm、短径24cm、厚さ20.3cm、重量12,500g。最小は長径9.9cm、短径8cm、厚さ6.3cm、重量690gあり、平均値（完形もしくはほぼ完形から算出）は長径22cm、短径17cm、厚さ12.6cm、重量4,514gである。前期同様にやや小型と言って良いであろう。完形品は49点中44点（89.8%）であり、完形品の占める割合が非常に高い。

しかしこうした多孔石が中期末の段階、すなわち敷石住居跡・配石遺構の登場とともに極端な変化を見せる。この変化を田篠中原遺跡の多孔石の分析をとおして見てきたわけである。

とりわけ出土状況から検討してみた場合、多孔石は配石遺構での使用あるいは屋外での使用を原則として、そこで執行された何等かの祭祀活動に伴う祭祀具とみることができるとはなから

うか。そして敷石住居跡の構成石（縁石・張り出し部等）にも多数転用され使用されていることを考えると、敷石住居跡構築にあたっては配石遺構で執行された多孔石に伴う祭祀活動を受け構築されたと考えることも可能となる。さらに土壌の墓標となっている事例は、土壌内に埋葬された人物の生前における活動の反映、すなわち多孔石を駆使し配石遺構で執行された祭祀を司った人物を埋葬した場所ということも考えられるのではなからうか。こうした事実は後期になっても継続しているようである。内匠上ノ宿遺跡では配石遺構の検出はほとんどなかったが、屋外からの出土が多かったことは多孔石に伴う祭祀活動が継続して実施されていることを裏付けていることになる。

最後になりますが、今回の執筆にあたっては黒沢はるみさん、新谷さか江、平林照美さん、牧野裕美さん、光安文子さん、小菅優子さん、増田政子さんのご協力を得ました。記して感謝申し上げます。

註

- (1) 菊池 実編 『田篠中原遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
本遺跡からは環状列石1基、敷石住居跡11軒、竪穴住居跡2軒、配石遺構36基、屋外埋設土器12基、土坑22基、廃棄場所1カ所が検出されている。
- (2) 新井 仁編 『内匠上之宿遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
本遺跡からは縄文時代の遺構として住居跡4軒、土坑185基、屋外埋設土器10基、配石遺構5基、溝状遺構2基等が検出されている。
- (3) 小野和之編 『三原田城遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- (4) 石坂 茂編 『勝保沢中ノ山遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- (5) 友廣哲也編 『下牧小竹遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- (6) 都丸 肇・茂木 視編 『見立溜井遺跡・見立大久保遺跡』群馬県勢多郡赤城村教育委員会 1985
- (7) 菊池 実編 『三後沢遺跡・十二原II遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- (8) 飯島義雄編 『下箱田向山遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- (9) 右島和夫編 『分郷八崎遺跡』群馬県勢多郡北橋村教育委員会 1986
- (10) 原 雅信編 『清水山遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- (11) 黒岩文夫・富澤敏弘編 『中棚遺跡』群馬県利根郡昭和村教育委員会 1985
- (12) 関根慎二編 『糸井宮前遺跡II』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- (13) 小野和之・山口逸弘編 『房谷戸遺跡I』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- (14) 古郡正志編 『F9薬師原遺跡』藤岡市教育委員会 1985
- (15) 藤巻幸男編 『荒砥前原遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- (16) 大塚昌彦・小林良光編 『行幸田山遺跡』渋川市教育委員会 1987
- (17) 下城 正編 『大平台遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- (18) 桜岡正信・木津博明編 『上野国分僧寺・尼寺中間地域（1）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- (19) 徳江秀夫編 『荒砥二之堰遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- (20) 赤山容造・小宮俊久編 『三原田遺跡 第2巻』群馬県企業局 1990
- (21) 近江屋成陽編 『横俵遺跡群II』山武考古学研究所 1991
- (22) 大江正行編 『仁田遺跡・暮井遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990